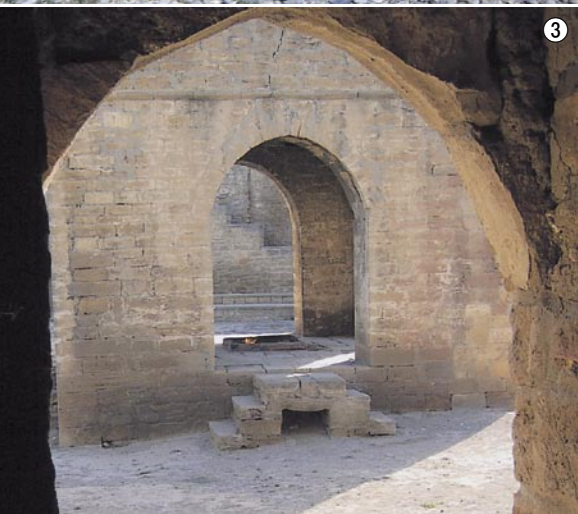




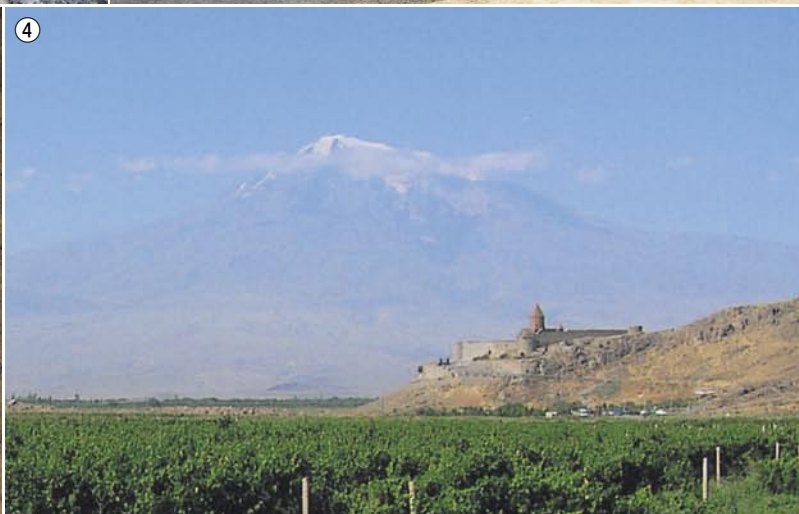
①



②



③



④

写真で見る社会科

カフカス世界の今むかし

旧シルクロード散策の目的で、南カフカス三国への地理研修旅行に出かけた。

現在カフカス地方の代表的宗教はキリスト教とイスラム教であるが、この地方は長くゾロアスター教（拝火教）の影響下にあった。アゼルバイジャンの首都バクー郊外に残るアテシュギャーフは、前6世紀頃の建築で18世紀に再建された拝火教寺院跡（写真③）である。拝火教はイランやインドに広まった宗教であるが、前7世紀頃にカスピ海方面で興ったといわれている。

同じくバクーの北マンマンディ村では丘の麓から天然ガスが自然に噴出し炎を上げ、さながら火焰山のようなものである（写真②）。しかし周囲には観光施設もなく、知らない人にはただのゴミ焼き場に見えるだろう。

この国は石油と天然ガスが豊富で、カスピ海沿岸には多くの油井があり、石油やガスを地方に送るためのパイプが道路沿いに走っている。石油と区別するためにガス管には黄色いペンキが塗られているのでよく目立つ（写真①）。地震も多く、最近ではほとんどの民家の屋根はトタンぶきになっている。内陸部は乾燥地帯で夏場は降水量も少なく、写真ではほとんど草も生えていないことがわかる。都市周辺では石油関連産業の恩恵を受けて

いる富裕層もいるが、地方との格差はかなり大きくなっているようだ。

ノアの箱舟で知られるアララト山（写真④、5123m）は連山で、地図では一般にトルコ語の「ビュユックアール山」という名称が併記されている。現在アララト山周辺はトルコ領だが、かつてこの周辺にはアルメニア人が住んでいた。オスマン帝国によって土地を追われたアルメニア人にとってこの山は今も心の故郷である。

手前に写っている丘の上にアルメニア側のキリスト教修道院があり、その数km先のトルコ側の国境線ではNATO軍が監視所を構えている。イスラム教の国トルコに米国を中心とするNATO軍が駐留し、世界最初のキリスト教国アルメニアと対峙しているのは、この地域の現在の複雑な政治情勢を反映している。アルメニアは独立後も親ロシアの立場を維持しているのである。過去の歴史をみても、多くの国や文明が交錯した地域であり、今も四か国（アルメニア、アゼルバイジャン、イラン、トルコ）の国境が接近した緊張地帯である。ただし写真のように、この位置から見るアララト山は富士山にも似て大変美しい姿である。

＜三重県 高田中学校 服部芳樹＞

写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。国内・海外で撮影された社会科の写真を、資料編集部「中学校社会科のしおり」係までお送りください。